

ギリシャ語－リュキア語名詞に現れる母音交代と 鼻母音化について — 人名・地名を素材として —

松川 陽平

0

古代小アジアにはギリシャ語の固有名詞(人名・地名)が残され、その名称が小アジアの各言語に転写されている¹。本稿で扱う印欧アナトリア諸語に属するリュキア語(Lycian)もそのような言語の一つで、多くのギリシャ語名がリュキア語に転写されている²。そのようなギリシャ語資料は、現存する資料自体が少ない小アジアの各言語の音韻論・文法を記述する上で非常に有益である。本稿では共時的音韻論を議論するが、一つは、リュキアに残る「リュキア語-ギリシャ語-アラム語併記碑文」の中でリュキア語名がギリシャ語に転写される際、どのような母音対応・交代があり、どのような条件の下でその交代が行われるのかを指摘する。もう一つは、リュキア語に転写されたギリシャ人名・地名を使って、リュキア語の共時的な鼻母音化現象を記述してみたい。

I

1

1.1

Hajnal(1995:11)は、リュキア語-ギリシャ語-アラム語の併記碑文において³、リュキア人名がギリシャ語式に直接転写される以下の例を引用し、リュキア語の母音が実際の綴りより広母音化されて発音されていたのではないかと考えている⁴。

lyk. <e> → griech. <a>: Pubieleje → Πυβιαλης⁵

Purihimetehe → Πυριματης

lyk. <u> → griech. <o>: Ūrtaqijahñ → Ὀρτακις

lyk. <i> → griech. <ε>: Mīzu → Μῆσος

しかし、併記碑文に現れるリュキア人名が元々少ないが、Hajnal は上記の例でしか広母音化を議論していない。そして、以下で検討するように、単純にギリシャ語表記からリュキア語の広母音化を想定することはできない。

1.2

先ず、併記碑文においてリュキア人名中の母音/i/がギリシャ語で/e/で転写される場合を考えてみたい。リュキア語/i/ > ギリシャ語/e/の例は、Hajnal の上記の例も含めて、4 例存在する。

- (1) Erttimeli > Ἀρτεμηλιν
- (2) Ikkwemi > Ἐνδομις
- (3) Mīzu > Μεσος
- (4) Zisqqa > Σεσκος

ところが、以下のようにリュキア語人名の/i/がギリシャ語でも/i/で転写されている人名が 8 例ある。

- (5) Eseimija > Σιμία⁶
- (6) Ixtta > Ἰκτας
- (7) Mahanepijemi > Μανηπιμις
- (8) Pubieleje > Πυβιαλης
- (9) Purihimetehe > Πυριματης
- (10) Sbjkaza > Σβιγασα
- (11) Sseprije > Σεπρια
- (12) Urtaqjjahñ > Ορτακιας

したがって、ギリシャ語の転写によってリュキア語の広母音化を証明するのは困難であり、何らかの音韻/音声的な条件の下で/i/が/e/に変化しているものと考えられる。

1.3

どのような条件の下で/i/が/e/に交代しているのかを考えるため、前節(1)から(4)の下線部の母音に後続している母音に注目する。(1) Erttimeli > Ἀρτεμηλιν で

は、波線のリュキア語の/e/がギリシャ語で/e/に変化して、直前の母音/i/が/e/に変わっている。(2) *Ikkwemi* > *Ἐνδομμίς* では、波線のリュキア語/e/がギリシャ語で/o/に変化して、/i/が/e/と交代している。(3) *Mizu* > *Μεζός* においては、リュキア語の/u/がギリシャ語の/o/になって、その前の母音/i/が/e/に変わっている。(4) *Zisqqa* > *Σεσκόως* では、波線のリュキア語の母音/a/が/o/に変化して、直前の母音も/i/から/e/に変わっている。今の母音変化をまとめると、リュキア語の/i/は、ギリシャ語の/e/, /o/, /o/の前で、/e/に変化する⁷。音韻論的には、リュキア語の高母音/i/は、ギリシャ語の中母音/e/, /o/, /o/の前で、ギリシャ語の中母音/e/になると言え、ウムラウト(Umlaut)によって引き起こされたものと考えられる。

1.4

一方、リュキア語/i/ > ギリシャ語/i/の場合、例(5)から(12)において、ギリシャ語の/i/に後続している母音が低母音/a/か高母音/i/である。すなわち、(5) *Eseimija* > *Σειμίας*, (6) *Ixtta* > *Ἰκτάς*, (10) *Sbikaza* > *Σπιγκάσα*, (12) *Urtaqijahñ* > *Ορτακίως* ではリュキア語/a/がギリシャ語でも/a/で、直前の母音/i/はギリシャ語で/e/に変化しない。(8) *Pubieleje* > *Πυβιέλης*, (11) *Ssepije* > *Σεπίε* では、リュキア語の/e/がギリシャ語で/a/に変化しているが、直前の母音はリュキア語でもギリシャ語でも/i/のままである。(7) *Mahanepijemi* > *Μανανημίς*, (9) *Purihimetehe* > *Πυριμητέης* では、それぞれ/je/と/hj/という音節が脱落しているが、(7)ではギリシャ語の高母音/i/と(9)では低母音/a/の前で/i/が保持されている。音韻論的には、リュキア語の高母音/i/は、ギリシャ語の高母音/i/と低母音/a/の前で、ギリシャ語において保持されると考えられる⁸。

2

2.1

Hajnal は、前述のように、リュキア語の母音/u/がギリシャ語で/o/に変化すると述べている。Hajnal の示した例も含めて、そのような変化を起こしている人名は併記碑文のなかで5例存在する。

(13) *Mula* > *Μόλα*

(14) *Qñturahaha* > *Κονδορασις*

(15) *χuwataje* > *Κοατα*

(16) *χudara* > *Κοδαράς*

(17) Urtaqijahñ > Ορτακιας

ここで注意しなければならないのが、リュキア語には母音/o/が存在しないことである⁹。例えば、ギリシャ人名がリュキア語に転写される場合、基本的にギリシャ語の/o/はリュキア語の/w/で対応する¹⁰。

(18) Αθναγόρας ~ Tēnegure

(19) Απολλωνίδης ~ Pūlenjida

(20) Δεμοκλειδης ~ Ñtemuxlida

(21) Έλποτας ~ Elpūweti

(22) Ερμακοτας ~ Ermaχūtas

(23) Τητροκλής ~ Ijetruχle

(24) Κενδεβουρα ~ χñtabura

(25) Κοπυίς ~ Kūprille/i-

(26) Μοσχάς ~ Mūσχχα

(27) Οσετης ~ Uhetēi

(28) Στολός ~ Stūleh

このようなギリシャ語/o/～リュキア語/w/の関係があるため、リュキア語からギリシャ語へ転写される際にも、リュキア語/w/に対してギリシャ語/o/が無標(default)の母音として選ばれると、当初考えていた。しかし以下の2例のように、リュキア人名をギリシャ語に転写する際に、リュキア語/w/がギリシャ語/w/に対応することがある。

(29) Pūbieleje > Πυβιαλης

(30) Pūrihimetehe > Πυριματης

したがって、この場合もある音韻/音声的な条件の下で/w/が/o/に変化しているものと考えられる。

2.2

前節で示したリュキア語/w/ > ギリシャ語/o/の変化は、例(13)から(17)において、常にギリシャ語の母音/a/(<リュキア語/a/)の直前で起こっている。すなわち、

(13) Mula > Μoλα, (14) Q̄nturahaha > Κονδορραsις, (15) χwwataje > Κορα, (16) χudara > Κοδαrαs, (17) Urtaqijahñ > Οrτακιαs というように。

しかし、リュキア語の/u/がギリシャ語でも/u/になるのは、ギリシャ語の母音/i/(<リュキア語/i/)の直前である: (29) Pubieleje > Πυβiαληs, (30) Purihimetehe > Πυρiμαtηs。

そのため、リュキア語/u/ > ギリシャ語/o/になるのはギリシャ語の低母音/a/の直前であり、/u/のまま変化しないのは高母音/i/の前である。音韻論的に言い換えると、リュキア語/u/ > ギリシャ語/o/の交代はギリシャ語の後続低母音/a/の影響、すなわちウムラウトの結果、引き起こされたと考えられる。

3

リュキア人名中の母音/e/はギリシャ語で/a/に転写されると Hajnal は述べている。Hajnal が引用した 2 例も含めて、併記碑文では以下の 5 例においてその母音交代を見ることができる。

- (31) Erttimeli > Ἀrτεmηλιν
- (32) Mahanepijemi > Μανaπιmιs
- (33) Pubieleje > Πυβiαληs
- (34) Purihimetehe > Πυρiμαtηs
- (35) Ssepije > Σaπa

一方で、リュキア語/e/がギリシャ語で/ē/または/o/に交代することが 3 例ある。

- (36) Ssewa > Σηο
- (37) Erttimeli > Ἀrτεmηλιν
- (38) Ikkwemi > Ἐνδουμιs

リュキア語の/e/がギリシャ語で/a/に交代するのは、ギリシャ語の/e/(<リュキア語:/i/(31)), /i/(<リュキア語:/i/ (32), (35)), /ē/(<リュキア語:/e/ (33), (34))の直前である。

リュキア語の/e/が/ē/になるのは、ギリシャ語の/o/(<リュキア語:/a/ (36)), /i/(<リュキア語:/i/ (37))の直前である。

また、リュキア語の/e/が/o/になるのは、ギリシャ語の/i/(<リュキア語:/i/ (38))

の前である。

リュキア語の/e/がギリシャ語で/a/になる音韻的条件を後続の母音の影響(ウムラウト)から見つけるのは難しい。なぜならば、例えばギリシャ語の高母音/i/の直前でリュキア語の中母音/e/は低母音/a/, 中母音/ɛ/, /o/になるからである。一方で、例(36), (37), (38)(リュキア語/e/ > ギリシャ語/ɛ/または/o/)の存在を考えると、Hajnalの指摘するリュキア語/e/ > ギリシャ語/a/の交代を正当と見なすのも困難である。したがって母音/e/の交代に関しては、さらに別の要因を考える必要があると思われる。

4

リュキア語内部における共時的なウムラウト現象の存在は、Laroch(1979), Melchert(1994a), Meriggi(1928), Neumann(1969)によって指摘されている。Melchert(1994a:296)からそのウムラウトのルールと例を引用する。

V[-high] > [α back] / ___C₀V[α back]

例: /nte ta-/ > ñta ta- ‘put in’, /emu/ > amu ‘I’, /ēnahe/i-/ > ēnehe/i- ‘maternal’, /mare/ > mere ‘laws’

現在確認されているウムラウト規則は、このように前舌-後舌母音の交代で口腔内の前後に関連するものである。しかし本稿で指摘したリュキア語<u> → ギリシャ語<o>とリュキア語<i> → ギリシャ語<ɛ>のウムラウトは口腔内の高低に関するものである。したがって、この母音高低ウムラウト現象は、リュキア語を母国語とする併記碑文書記のギリシャ語音韻論の知識の下で、引き起こされた可能性がある。

II

1

Hajnal(1995:219)はリュキア語の鼻母音化を通時的な観点から大きく二つ論じている。一つは、1) 母音に後続する鼻子音の影響によって、つまり同化によってその母音が鼻母音化するという現象である。もう一つは、2) */-CVNT(-, #)/ > /-CVⁿT(-, #)/というパターンで起こる鼻母音化である。すなわち、アクセントを伴った母音に鼻子音と閉鎖音が後続したときに、その母音が鼻母音化すると

いうことである。本稿ではこの二つの鼻母音化現象は共時的にも存在することを例示し、さらに別の鼻母音化パターンもあることも示したい。その際、ギリシャ語固有名詞(人名・地名)がリュキア語式に表記された例を用いる¹¹。その大きな理由は、リュキア語では表記されていないが、ギリシャ語固有名詞・人名では、多くの場合、アクセントの位置が明示されているからである。

2.1

先ず、前節の1) 母音に後続する鼻子音との同化による鼻母音化の例を示す。

- (39) Αθήναι ~ Aṭānas
- (40) Αθηνάγορας ~ Tēnagure
- (41) Ἄρτεμις ~ Ertēmi
- (42) Ἴωνες ~ Ijāna
- (43) Ἴωνία ~ Ijāna
- (44) Καλλιόναξ ~ xelijānaxsah
- (45) Λίμυρα ~ Zēmuri
- (46) Σιμηνα ~ Θibān
- (47) Χερσόνασος ~ Krzzānase

この鼻母音化のパターンは基本的に同化現象なので、鼻母音化した母音に後続する鼻子音が消失することはない¹²。ただし、以下の例では鼻母音化が起っていない。

- (48) Ἀμόργης ~ Hūmrxā
- (49) Ἀπολλωνίδης ~ Pulejnda
- (50) Δεμοκλειδης ~ Ntēmuxlida
- (51) Κινδανυβις ~ xītenubeh
- (52) Κπαραμω ~ xpparama
- (53) Μαναπιμς ~ Mahanepijemi
- (54) Σιμιας ~ Seimija/ Eseimijaju
- (55) Σταμάς ~ St[e]maha
- (56) Τευινασσος ~ Tewīnezēi/ Tewīneza
- (57) Τουξομενδουος ~ Tesimñti

ギリシャ語はリュキア語にとって本来外来語であるので、鼻母音にしないそのままの形で転写しようという意識があるから鼻音化が避けられた可能性がある。

以上のように、Hajnal が歴史的観点から指摘した 1)の鼻母音化規則は基本的に共時的にも適用可能である。

2.2.1

Hajnal の鼻音化規則 2)は*/-CVNT(-, #) > /-CV^{nt}T(-, #)/であった。この規則に当てはまる共時的な例を示す。

(58) Κάνδουβα ~ χākbi¹³

(59) Τισευσέμβρα ~ Tikeukēpre

この鼻母音化は鼻子音が直前の母音に取り込まれることによって発生するので、鼻子音は消失する。そして、鼻音化規則 2)は共時的にも存在していることがわかる。

2.2.2

Hajnal が鼻音化規則 2)*/-CVNT(-, #) > /-CV^{nt}T(-, #)/で母音の上にアクセント記号を付けて、その規則を限定しているのには理由があると思われる。なぜならば、リュキア語でアクセントのない母音は語中音脱落(syncope)するからである(cf. Melchert(1994a:326))。以下の例では、残念ながらギリシャ語の方でアクセント表記がないので厳密にはわからないが、おそらくアクセントの無い位置で母音が消失し、鼻母音化も起こっていないと考えられる¹⁴。

(60) Ισινδα ~ Isñt[a]

(61) Κενδεβορα ~ χñtanubeh

(62) Κεσινδηλις ~ χesñtedi

(63) Κινδανυβις ~ χñtenubeh

(64) Κονδορασις ~ Qñturahaha

(65) Τουξομενδυος ~ Tesimñti

しかし、Καδυανδα ~ χadawāti のように明らかにアクセントの無い位置でも鼻

母音化が起こっている場合もある¹⁵。それに加えて、Λύσσανδρος ~ a) Lusātrahñ/b) Lusñtrahñ/c) Lusāñtrahn という例は非常に示唆的である。先ず、ギリシャ語名で /-CVNT(-, #)/ のように母音にアクセントが存在しない。これがリュキア語の a) の形では、アクセントが無いにもかかわらず鼻母音化している。b) ではアクセントの無い母音が消失している。c) では、おそらく Hajnal の鼻母音化規則 1) によって、すなわち後続の鼻音による母音の同化によって、鼻母音が派生していると考えられる。そのため例は少ないものの、アクセントの無い母音でも /-CVNT(-, #)/ > /-CVⁿT(-, #)/ という共時的な鼻母音化規則によって鼻母音が発生したのではないかと考えられる¹⁶。

c) のパターンの鼻母音化の例として、Ἀλέξανδρος ~ Alayssā[n̄tra] (/ Alayssa[n̄]tra), Ἐσσηνία ~ xssēñzija が付け加えられる。したがって、/-CVNT(-, #)/ には鼻母音化規則 1) の適用も共時的には存在していたと考えられる。

最後に、もう一つ共時的な鼻母音化パターンを記述しておく。今のところ一例であるが、Ἰδάριος ~ Idāxre にみられるように、口蓋音の前でも鼻音化が起こっている。

以上のように、I では併記碑文に現れるリュキア語からギリシャ語に転写される人名を用いて、リュキア語話者の中に見られるギリシャ語のウムラウト現象の存在可能性を指摘した。II ではリュキア語に転写されたギリシャ語名からリュキア語の鼻母音化のパターンを記述した。どちらもギリシャ語資料なくしては考察できない共時的な現象である。

註

1. 例えば Zgusta(1964, 1984)ではギリシャ語名とともに小アジアの言語の人名・地名が収集されている。
2. リュキア語の概説については Melchert(1994a, b), Neumann(1969)などを参照。
3. Melchert(私信)によれば、3言語併記碑文でリュキア語テキストはギリシャ語に逐語的に訳されているわけではない。リュキア語テキストの内容を要約するような形でギリシャ語訳されている。なお Melchert 教授(ノースカロライナ大学チャペルヒル校)には本稿に限らず、アナトリア諸語全般にわたってご教示をいただいている。この場を借りて謝意を表す。
4. Melchert(1994a:40)によれば、リュキア語の綴りは、基本的に p, t, k は無声閉

鎖音、q, x はある種の無声舌背閉鎖音、b, d, g は有声摩擦音、s は無声歯擦音、z[ts]は無声破擦音、θは無声歯擦音、l と r は流音、m, n は鼻音で \tilde{m} , \tilde{n} は成節的 (syllabic) な鼻音である。母音は i, u, e, a の 4 母音で、 \tilde{e} , \tilde{a} が鼻母音である。なお、リュキア語の正書法では母音の長短の区別とアクセントの位置は表記されていない。

5. ギリシャ人名にアクセント記号がないのは、これらの人名が碑文に書かれたものであるからである。
6. (5) Eseimija > Σμίας では /ei/ > /i/ となっているが二重母音の交代は本稿では扱わない。
7. e > \tilde{e} , e > o, u > o, a > \tilde{o} (=リュキア語 > ギリシャ語) のように短母音が長母音になったり、母音が交代する理由は現在のところわからないが、例えば、リュキア語でアクセントのある母音はギリシャ語で長くなっているのかもしれない。
8. Tikeukēprē > Τιουκεμβρα においてリュキア語の /i/ は、ギリシャ語の /eu/ (<リュキア語: /eu/) の前で、/i/ になっている。二重母音 /eu/ の後ろの母音 /u/ に影響されて /i/ を保持しているのかもしれないが、いずれにせよ二重母音は本稿では扱っていない。
9. 本文中のギリシャ-リュキア人名は、あるギリシャ語-リュキア語対訳テキストに表われる名前を収集したのではなく、その対応関係は Heubeck(1965), Laroche(1967, 1974), Melchert(1993), Neumann(1970, 1978), Schmitt(1982), Shevoroshkin(1977), Zgusta(1964) によって明らかにされたものである。
10. 本文中に示したようにギリシャ語人名中の母音 /o/ は多くの場合、リュキア語の /w/ に対応している。しかし、ギリシャ語の /o/ または / \tilde{o} / が /w/ ではなく /a/ に対応している場合もある。

Αὐτοφραδάτης ~ Wataprddata

Εμβρομος ~ Hm̄prama

Τάσος ~ Ijaeusas

Τωνία ~ Ijāna

ただし、Schmitt(1982:382)によれば、Αὐτοφραδάτης ~ Wataprddata はイラン語起源である。この例のようなイラン語起源のギリシャ語~リュキア語人名は存在するが、イランからギリシャ語とリュキア語のどちらに最初に入ったかは定か

でない場合が多い。Υδάρνης~Widrñna も Schmitt(1982:376)ではイラン語起源の人名となっている。しかし、Melchert(私信)によれば、この例はイランから最初にリュキアに入り、後にギリシャに伝えられたようである。

11. ギリシャ人名のリュキア語名転写の研究は前期の注 9 で示した先行研究に依存している。
12. 例(40) Αθηναγόρας ~ Tēnagure, (41) Ἄρτεμις ~ Ertēmi, (42) Ἰῶνες ~ Ijāna, (43) Ἰωνία ~ Ijāna のようにギリシャ語でアクセントのない母音でもリュキア語では鼻母音化している。一方で、Αμμίς ~ M̄mije, Πηγῶμας ~ Pijm̄mah, Συνοτος ~ S̄n̄n̄teḥ, Ταμάντις/ Ταμειρίς ~ Tm̄peime, Τεμβ[α]μίς ~ Tm̄peimeḥ の例では鼻母音化することなく、母音が語中音脱落(syncope)している。残念ながらギリシャ語名でアクセント表記がないので確言できないが、この語中音脱落はリュキア語のアクセントのない母音は脱落するという規則(Melchert(1994:326))によるものと考えられる。どこで語中音脱落が起こるのかという問題は、リュキア語のアクセントと音節構造に関わる問題であり今後の研究課題である。
13. /k/ < *d/ / ___ *w の音韻変化については Melchert(1994a:85)を参照のこと。
14. Τροκονδᾶς ~ Trqqas では音節単位で脱落している。
15. Καδύανδα ~ ḡadawāti では、例(50)から(55)のように語中音脱落がなぜ起きないか(*ḡadawāti)、という理由について考えられるのはリュキア語における音接触(phonotactics)の制限である。Melchert(1994:298-299)のリュキア語の音接触のリストには、語頭でも語中でも[wñ]という音連続は無い。したがってこの音連続を避けるために、語中音脱落ではなく鼻母音化がなされたと考えられる。
16. Τριενδασις ~ Trijētezi という例の場合は、ギリシャ語でアクセント表記がなされていない。そのため、母音アクセントの有無によって鼻母音化を議論することはできない。

引用文献

- Hajnal, I. (1995). *Der lykische Vokalismus*. Graz.
- Heubeck, A. (1965). *Kleinasiatische*. 4. Zu den Sibilanten im Lydischen und Lykischen, 74-81, *Sprache* 11
- Laroche, E. (1967). *Comparaison du louvite et du lycien*, 44-66, *BSL* 62
(1974). *Les épitaphes lyciennes*, 123-148, *FdX* 5
(1979). *L'inscription lycienne*, 49-127, *FdX* 6
- Melchert, H.C. (1993) *Lycian Lexicon*. Chapel Hill, N.C.

- (1994a) *Anatolian Historical Phonology*. Amsterdam.
- (1994b) Anatolian, 121-136, *Langues indo-européennes*, ed. by F. Bader. Paris.
- Meriggi, P. (1928). Über einige lykische Pronominal- und Verbalformen, 1-10, *IF* 44
- Neumann, G. (1969) Lykisch, 358-396, *HbOr*
- (1970). Beiträge zum Lykischen IV, 54-62, *Sprache* 16
- (1978). Spätluwische Namen, 126-131, *KZ* 92
- Schmitt, R. (1982). Iranische Wörter und Namen im Lykischen, 373-388, *Serta Indogermanica* Festschrift für Günter Neumann zum 60. Geburtstag, ed. J. Tischler. Innsbruck.
- Shevoroshkin, V. (1977). Zu einigen Verwandtschaftsbezeichnungen im Lykischen und im Lydischen, 131-144, *MSS* 36
- Zgusta, L. (1964). *Kleinasiatische Personennamen*. Prag.
- (1984). *Kleinasiatische Ortsnamen*. Heidelberg.

Synchronic studies in the comparative phonology of Greek and Lycian

Yohei MATSUKAWA

In this paper I have examined two phonological problems in Greek and Lycian:

First, I point out Umlaut phenomena by utilizing the Greek personal names transcribed from the Lycian ones in the 'Létidon Trilingual' (Lycian-Greek-Aramaic). Hajnal (1995:11) says that since Lycian /e/, /u/ and /i/ are transcribed into Greek /a/, /o/ and /e/ respectively in the Trilingual, those vowels in fact became more open in pronunciation.

lyk. <e> → griech. <α>: Pubiejeje → Πυβιελης, Purihimetehe → Πυριματης

lyk. <u> → griech. <ο>: Uṛtaqijahñ → Ορτακις

lyk. <i> → griech. <ε>: Mīzu → Μεσος

As is shown in this paper, however, the Lycian vowels do not always correspond to the Greek ones. Rather, I illustrate the Umlaut rule: Lycian /i/ becomes Greek /e/ before /ε/, /o/, /ō/ in Greek.

Erttimeli > Άρτεμηλιν, İkkwemi > Ένδουμις, Mīzu > Μεσος, Zisqqa > Σεσκας

With respect to the phonological change: Lycian /u/ → Greek /o/, I also show another Umlaut rule: Lycian /u/ becomes Greek /o/ before Greek /a/.

Mula > Μολα, Qñturahaha > Κονδορασις, χmwataje > Κοατα, χudara > Κοδαρας, Uṛtaqijahñ > Ορτακιας

Unfortunately, it is not possible to introduce any phonological rule to restrict Lycian /e/ → Greek /a/ at the moment. However, I give some counterexamples to the phonological change of Lycian /e/ → Greek /a/ in Hajnal, loc.cit.

Secondly, I describe two synchronic nasalization rules in Lycian in terms of the Lycian names transcribed from the Greek ones. Historically, Hajnal(1995:219) investigated a nasalization rule: */-CVNT(-, #)/ > /-CVⁿT(-, #)/. Synchronically, it is possible to add another nasalization rule: /-CVNT(-, #)/ > /-CVⁿT(-, #)/ because Lycian has two examples, such as Καδύανδα ~ χadawāti and Λύσανδρος ~ Lusātrahñ(/Lusñtrahñ/ Lusāñtrahn). Besides, there was possibility that Lycian could nasalize vowel before dorsal stop. Example: Ιδαγρης ~ Idāγre.